
TrueLove

朝雛みか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

True Love

【Nコード】

N8917Q

【作者名】

朝雛みか

【あらすじ】

これは、少しでも昔々のお話。

この国に住む、王子と姫のお話。

王子には王子の守らなければならぬものが、姫には姫の守らなければならぬものがあって、2人とも絶対に知られてはならない秘密をもっている。

序章（前書き）

「愛はどんな形でも愛。」

ならば、どれも真実の愛だろうか？

きっとそうなのだろう。

いや、そうであって欲しい。

私はそう思う。」

序章

トリネゴア王国

貧しくはなく、むしろ裕福な国だった。

この国にも法律があり、その法律によって国は国として成り立ち、また平和な世の中であつた。

僕は、なにも遠い遠いおとぎ話をしようとしてるわけではない。
これは、少しだけ昔々のお話。

この国に住む、王子と姫のお話。

王子には王子の守らなければならないものが、姫には姫の守らなければならないものがあつて、2人とも絶対に知られてはならない秘密をもっている。

いや、秘密なんかもってないかもしれない。

でも、これはまだきつとプロローグ。秘密があるって言つた方が、おもしろそうでしょ？

おとぎ話でなくても、きつと大事なお話。

君にだってあるだろう小さな秘密くらい。

その秘密を隠すことが正しいの？それともさらけ出すことが正しいの？

この国に大事なことは、平和であること。

その為の、法律であり、王様である。

その王様は男でなくてはならない。

何故か？そう決めることで、この国のトップが男であることを、紛
いないものにして、自国や他国からの攻撃を防ぐため。

差別に聞こえるだろうか？

でもこの国を作った王様は、それが平和への道だと言って法律に書
き記した。

もう一度だけ言っておこう。

これは、少しだけ昔々のお話。

一章

(one side.)

この国に待望の赤ちゃんが産まれたのは丁度18年前のことになる。

その赤ちゃんというのが、王様と后様の間に生まれた子で、名前を
ジヨナシュワという。

なんともへんてこりんな名前をつけたものである。
だがこの赤ん坊を、皆はその名を縮めてジヨンと呼んだ。

ジヨンは現在の王様のただ1人の子で、王位を継承できるものは彼
しかいなかった。

それゆえに、父にも母にも溺愛されながら育っていった。

だからなのは分らないが、王子の体は並みの男と比べると少し
華奢だった。

しかし、顔つきは男そのもので、鼻はスツと通り、少し切れ長の目
が王としての威厳を醸し出していた。そして肌は日に焼けていて、
華奢な体を補うように見えた。

「ジヨン様〜！ジヨン王子！！」

召使いの声が大きくて白い立派な城中にこだましていた。

3階にある少し古びた扉を開けると、『ビュオツ』と音を立てて召使いを風が襲った。

召使いは、反射的に目を瞑り次に目を開けたとき、そこにあったのは、カーテンがバタバタとなびく高さ3メートルはあるうかと思われる大きな窓に、半分お尻をついて外を黄昏た目で眺めているジョンの姿だった。

「ジョン王子、こちらにおられましたか。」

すると王子はニコツと笑って、その清々しい何とも言えぬ声を発した。

「ああ、トム。今日は見つけるのが早かったな。」

「ジョン様。何を悠長なおっしゃっているのですか。今日はあなた様にとって大事な1日ではありませんか。」

「おっと、そうだったか？だがトム、俺にまず言う事があるだろう。」

するとトムと呼ばれた召使いは、「アラアラアラ」と小さな声を出し、驚いた素振りを見せると、

「そうでございました。ジョナシユワ・トリネゴア王子、今日をもつて齡18になられ、成人になられたこと、おめでとうございます。今まであなた様に仕えたこのトム、とても嬉しい限りでございます。」

目に涙を浮かべそう言うので、演技でないことが容易に理解できた。

トリネゴア王国では、18歳になると成人とみなされ、お酒やたばこ、結婚、参政権などが許された。

それ故に、18になるという日には格別のパーティーが行われるのだった。

「おお、トム。泣くほど嬉しいか？でもまだ俺に使えるのだろう？ならばそのようなグシャグシャの顔では、お父様の前には立てぬぞ。」

ジョンには普通のことを話しても、どこか優しさを感じさせるものがあつた。

「ありがとございます。トムは、一生ついてゆきますよ。」

召使いがそう言うと、ジョンは今度は口角をあげてフツと笑った。

そして今日、その18を祝う舞踏会が行われるのだった。

この舞踏会は、王子の婚約者を決める舞踏会でもある。

18歳で結婚も出来るようになるから、王様の命で、ジョンはたくさんいる女子オナコの中から一番気に入った人を選ばなければならなかった。

国中の民がこの舞踏会に参加出来るため、この国の娘達はこぞって城に訪れた。

その中から1人を選ぶのは、大変にもほどがあると呆れるが、王子はその状況をなかば楽しんでた。

「お父様。ただいま参りました。」

召使いのトムにエスコートをされながら、ジョンは王室へと入っていった。

「よくきたな、ジョンナシユワ。しかしなジョン、お父様のことはパパと呼びなさいと言ってるだろう?」

優しい声で王様はそう言った。

「お父様。私もパパと呼びたいのですが、家臣達の前でそのようには呼べませぬ。お父様も一国の王様であります。時と場所をお選びください。」

この年まで甘やかされ続けて育てられたとはまるで思えないほど、とても真面目な答えに、王様は「ファファファ」と笑い、

「誠に頼もしい王子じゃ。」

ともらした。

家臣達もまた、うんうんと頷きジョンに尊敬の目を向けていた。

「それではジョンよ。この衣装を着て出るとよい。」

そう言っ指を鳴らすと、ジョンのもとに白を基調として銀や金、また赤、黒、青で装飾された、「さすが王室」と言いたくなる衣装が出された。

「それじゃ。頑張^{キサキ}って后を見つけるんだぞ。」

と王様が話すのを聞いて、ジョンはその部屋をあとにした。(another side.)

夜。目が覚めると、父の咳をする声が聞こえる。

自分はどうかやら昼寝をして、夕方を寝過ごしてしまったようだ。

「父ちゃん。大丈夫かい？」

「ああ、今日はまだ元気そうだ。優しいねえ、お前は。本当に母ちゃんそっくりだ。」

「照れるから、そんなこと言わないでくれ。」

町娘。と呼ぶのにふさわしいその少女は、^{ヨソイ} 齢18であった。

自分が18歳になって半年が過ぎた今日、この国の中心に位置するお城では、王子の成人を祝う舞踏会が行われるということで、国中が浮き足立っていた。

この娘もまた例外ではない。

「絶対に王子を手に入れなくちゃ。」

父に聞こえないように、小さな声で気合いを入れ、手は拳を作るように握られていた。

何故かというと、父の病気は『不治の病』とは言わないまでも、母を死に追いやった程のかなり重度の病で、治すのにどうしてもお金がいる為だった。

そして、その事を父に言えば、確実に
「私のためにそこまでしなくていい。」
と反対されただろう。

だからこそ、父に気づかれないうちにドレスも作り、アクセサリ
や靴も買った。当然ガラスの靴を。

そして、綺麗というよりは華厳といった方が相応しいとも思えるド
レスを身につけ、父に向かって一礼をした。

「それでは父ちゃ、お父様、舞踏会に行つて参ります。」

「ああ、楽しんでくるんだよ。ルナ。」

父ちゃんと言いそうになったことが、よっぽど面白かったのか、「
ハハハハ」と笑いながら、父ちゃんは言った。

そして『ルナ』と呼ばれた少女はもう一度深く一礼をし、家を出た。
その家の表札には『マイアーズ』という文字が、はつきりと彫られ
ていた。

どうして、お金のないこの家で、素晴らしいドレスを作れたのかと
いうと、この町商人の『マイアーズ』のお店が、ドレスなどを扱う
服屋だったからなのは、少々察しがついていただろう。
そして買った靴やアクセサリは、ルナが働いて稼いだお金で買った
物だった。

ルナは汽車に乗り、王子の待つ大きな白い城を目指した。

汽車の中は、人であふれていると思っていたが、夜ももう9時を回っていた為か、さほど多くの人は乗っていなかった。

——人、少ないなあ。皆もう行っちゃったのかな？——

なんて思っていると、

「イデッ！」

とだいたい5、6歩先から大きな声が聞こえてきた。

見ると、青い帽子をかぶった男の子がつまづいて倒れていた。

「大丈夫？」

近づいて声をかけると、涙を目に留めた顔を勢いよくあげ、

「あのね、僕、男の子だから痛くないの。痛くない、。」

と言った。

そんな男の子を見てルナはフツと優しく笑い、その男の子を昔の自分と重ねて、やっぱり自分とは違うなあと思った。

が、言うてやれることは言うてやろうと思った。

「でもね坊や。痛いときは痛い、辛いときはつらい、悲しいときは悲しい。って言わないと誰も分かってくれないよ。人の感情に、男の子も女の子もないし、貴族も平民もないんだ。ほら、泣いてごらん。」

そう言いながら、下のマブタに指をやる。

すると少年は促されるようにボロボロと泣き出した。

ルナの言ってることは少年には、ほとんど理解できなかっただろう。それでも泣き出したくなる説得力があったように思った。

「いいかい、坊や。自分の感情に嘘をついて生きていくとね、心が貧しくなっちゃうんだ。」

それにね、自分の心と正直に生きた方が楽しいだろう。

私は、今になってやっとわかった気がするんだ。

今、凄く嬉しくて楽しいからさ。」

ニコツというきれいな笑いに、少年はつい涙を止めて見とれてしまった。

「おねえちゃん、ありがとう。」

そう、つい言ってしまった。

「坊や、お名前は？」

「僕は、ジョナシ——。」

「え？もう一回言って？」

「僕は、ジョン。ジョンだよ。」

そう言ってジョンはニカッと笑った。

ルナは今、自分に嘘について、好きでもない王子と結婚するために頑張っているのに、自分の心に嘘についてないから嬉しくて楽しいというのは、なんとも矛盾しているように思える。

だが、今ルナの心にあるのは父を『助けたい』という、感情ひとつのみ。

だからこそ、自分に嘘はないと思えて、そして嬉しく感じるのかも
しれない。

そして、2人に乗せた汽車が城の目の前に着いた。

王子の誕生日を祝う舞踏会も中盤を過ぎた頃だった。

ルナは駅から一目散に城へと向かった。

城の前には門番がいて、ドレスコードをチェックしていた。

そんなチェックの時間でさえ、もう鬱陶しい。

何せ、夜の11時をまさに迎えようとしていたからだ。

王子が后候補を見つけていたら、一大事だということで慌てて王子キサキを探す。

——っていつても、王子の顔は肖像画でしか見たことないんですけど、。——

そんなことを考えていると、いつの間にか人混みの中に入ってしまった。

四方八方、どこを向いても人、人、人。

こんなんでも王子を見つけられる訳もなく、必死にそこから抜け出した。

——まったく、貴族ばっかで、王子の嫁になろうなんて奴がほとんどいない。必死になってる私がバカみたい。——

ようやく抜け出した先は、バルコニーのような場所で裕福にもプールなんかついてた。

そこには1人、この城の中で一番高そうな服を着て、プールを眺め黄昏ている男の人がいた。

その男性は、不意に振り返り、そして目があつた。

いや、2人の視線が絡み合った、といった方が正しいかもしれない。

ルナは、王子に気にいられようとしてここに来たのを忘れ、その人から目が離せなくなった。

これが、俗に言う『恋』なのだろうか。
きつと一目惚れというやつだ。

でも、男が女に惹かれ、また女が男に惹かれる。そんなような本能的な部分で、ルナはこの男に惹かれていた。

すると

「おねえちゃん。」

そう、男は呟いた。

(J o n s i d e)

ジョンはバルコニーのプールサイドで、ついブーツとしていた。その理由は自分にもわからない。

きつと、昼過ぎから始まった舞踏会に飽き飽きしていたんだろう。

ふと、後ろから名前を呼ばれた気がした。ずっと待っていたその声で。

そして振り返ると、そこには華やかなドレスに身を包み、必死になつて何かを探していたような顔の女性がいた。

その顔を見て、思い出さないわけがない。ずっと昔に出逢つて、憧れのような感情をもった人だ。

名前は聞けなかった。

だから、今日来てくれることを願っていた。

ジョンは確かめたかったんだ。この感情が、好きという気持ちなのかどうか。

目と目があった今、確信を持って言える。

これが『恋』なのだと。

そして、のどを通して口から声が漏れ出てしまう。

「お姉ちゃん。」

ルナは『えっ?』と驚きの顔を見せた。

「い、いや、お嬢さんは? お名前何というのですか?」

何か言わなきゃと思い、出てきたのがこれだった。

「あんた。名前を聞くなりまずは自分からって、どっかの国では言うらしいよ。」

「これは失礼。私は、ジョナシユワ・トリネゴアです。あなたは?」

「へえ、じゃあジョンだね。」

、、、え?! トリネゴア? ってことは、、王子!!?」

ルナは『しまった』という顔をして、ニコツと笑顔を試みせた。

「わたくしは、ルナ・マイアーズでございます。王子の^{キサク}后になりました、こちらに来ました。」

ジョンはルナがいきなりキャラが変わったことが面白くて、心の中で笑っていた。

「またどうして僕なんかの后になりたいのですか?」

「私、昔からあなたのことが好きで、。結婚してください！」

——俺のこと王子って気づかなかったくせに、昔からって無理あるだろ。——

とか思いながら、実は嬉しかったりするジョン。

「ルナさん。まずは踊りませんか。」

もしこの国の公用語が英語だったら、かっこいいのだろう。なんとって、Shall we dance? だから。

2人はジョンのエスコートの中、恥ずかしさで顔を合わせられないまま踊った。

そして気づくと時刻は12時を跨いでいた。

楽しい時間は過ぎるのが早い。

特に好きな人という時間は、すぐに過ぎてしまうのだった。

「また会えますよね？」

と、ルナさんに聞かれると嬉しくて頬が緩む。

そしてジョンはルナの頬に唇を寄せ、その赤くなった顔に向かって言うんだ。

「明日からここで一緒に暮らそう、ルナさん。」

「はい。」

その顔がまた恥ずかしそうで、また可愛いと思ってしまっただった。

二章

(Jon side)

——舞踏会の日、俺は『運命』だと思った。

顔を、そして目を見た瞬間に、この人が運命の人だと思ったんだ。ルナの目は、ものすごい勢いで俺を求めていた。俺にも彼女にも、過去にどんなことがあったって全てを忘れて愛してしまうほどに、好きだと思った。——

ジョンが広い家の廊下を物思いに歩いていると、その歩く先にルナの姿があつた。

「お、おはよう。」

と照れながら言えば、ルナはその声で初めてジョンの存在に気づいたように、一度「あっ！」と驚いてから、

「おはよう、ジョン。」

と笑って返した。

ルナがジョンを通り越して行こうとするので、後ろから抱き付いた腕を脇から回して右手の指と左手の指をルナのお腹の前で交わらせた。

ジョンはこの格好が（恥ずかしくてたまらないけど）好きだ。

「愛してるよ。ルナ。」

と耳元でささやけば、ルナは少し苦い顔を浮かべた後、フツと優しく笑って、

「私もよ、ジョン。」

その言葉を聞いてから、目の前にあった部屋にルナを押し込み、扉が閉まると同時に、唇を寄せた。

熱いキスになるかと思えば、ルナが唇を手で覆い、

「こういうことは結婚式を挙げてからにしましょう。」

と微笑みながら言った。

本当は、好きだからこそ欲求不満になりそうなのだが、好きだからこそ、また我慢ができるとジョンは思った。

「そうだね。でもルナ、俺は愛してるよ。」

そういつて部屋を出ていった。

そして、ジョンは3階にあるあの古びた扉を持つ部屋に向かって歩き出した。

部屋につくなり、窓を開け、黄昏るように考え始めた。

——ルナはどうしてしまったのだろうか？

舞踏会のあの日、俺を見るルナの目は、確かに俺を求める目だと思っただ。

でもあの日から今まで、その目は見られなくなった。
婚約を王様に報告してすぐに、不治の病と呼ばれていた病に犯され

た、父を助けて欲しいと懇願された。

もしかして、考えたくないけど、俺に近づいたのは金目当てだったのか？

信じない、信じたくない。金目当てだなんて、いや、信じよう。ルナを。ちゃんと愛してくれていると。

あの日のあの狂おしい程俺を求める目は、もう見れないのだろうか。

そんな事を考えながら、窓から入る陽射しでウトウトとしてきた。

(Luna side)

——あの日以来、彼は顔をあわす度にいつでも「愛してる」と言ってくる。

本心で言っているのか、疑問がこみ上げてくる。

私だって、愛してる。

愛してるけど、恥ずかしくてなかなか口に出せないんだ。

でも、口に出しにくいからこそ、その思いに真実味が出てくるんだと思うんだけど、私は間違ってるのかな？——

ルナはそんなことを考えながら廊下を歩いていた。

すると不意に声をかけられた。

「お、おはよう。」

ルナは急のことで、「あつ。」と驚きの声が漏れたが、その照れなから言った挨拶がジョンからであったことはすぐにわかった。

ジョンは王子だが、その雰囲気などから『可愛いなあ』と感じさせる部分があった。

ルナがそれに恥ずかしさを感じて、視線を逸らし食堂に向かおうと歩みを前に出すと、後ろから優しく抱きしめられて、足が止まる。

お腹の前で結ばれている彼の手がルナを堪らなくドキドキさせる。

「愛してるよ。ルナ。」

——ただ。こう何度も言われると、誰にでも言ってるんじゃないかって思っちゃうよ。——

つと一瞬考えてから

「私もよ。ジョン。」

と答えた。

それから、一番近くにあった部屋に連れ込まれ、ルナは壁を背にキスされそうになった。

でも、今はなんだかそんな気分になれなくて、

「こういうことは結婚式を挙げてからにしましょう。」

と言って、半ば強引に拒否した。

ルナはそれからのことは、少し記憶が薄い。

それはジョンに対する罪悪感と、また聞こえてきた「愛してる」と

言う言葉に対する疑問感からだった。

それでも、ルナは思った。

——信じたい。本当に私の事を思って、愛していると行って、他の人になんか言っていない。私にだけ、言ってるんだ。——

その日の夜に、ルナにとって事件とも呼べる出来事が起きたのだった。

その日の夜、昼間、素っ気なく拒否してしまったことを謝ろうと、ジョンを探していた時の事。

国を代表する城が為に、当然客人をもてなす部屋、いわゆるゲストルームがあるわけで、

その部屋の前に通りかかった時に不意に笑い声が聞こえた気がした。気になって、聞き耳を立ててみたが、あまり中の声が聞こえてこない。

そこで、気づかれないように、そーっと2、3センチだけドアを開けてみると、そこから聞こえてきたものは、ルナの聞き慣れた声で、聞き慣れた言葉だった。

「——愛してるんだ。だから、——」

愛してるんだ。

の後はもう聞きたくなかった。だから、完全に耳を塞いで、自分の部屋まで駆けだした。

(Jon side)

物音が聞こえた気がした。

ただそれだけだけど、何故だかルナのような気がしてなかった。

「ルナ?!」

と声をあげて立ち上がり、部屋をでてルナの部屋に向かう廊下を見る。

しかしそこには誰もいなかった。けど、誰かがいたような気配があった。

(Jon side)

ジョンはゲストルームに戻り、客人に微笑みながら、

「今日はどうもありがとう。また話を聞いてくれよ。」

と言つて、丁重にお帰りいただいた。

その客人も、

「ああ、またな。」

と、明らかな男声で帰りの合図を送つて、外へと歩き出した。

ジョンは王子である前に、1人の男である。その為、男友達は多くいた。

その中でも仲が良かったのがこの男で、ジョンの唯一物心つく前か

ら一緒にいる、いわば親友だった。

名前はカルティス・オブライエン。

皆には、「カルティ」とか「カル」と呼ばれている。

身分でいうと、エリート貴族というのがピッタリの好青年だ。

カルティの帰った後、ジヨンはどうしても気になって、ルナの部屋へと足をのばした。

『トントン。』

「ルナ？いるか？」

「。。」

部屋には人の気配はするが、返事がない。

「ルナ？いるだろ？」

「。。」

「入るぞ。」

と言ってドアを開けると、ベッドの上でうずくまって布団の中にくるまって、まるで拗ねているルナがいた。

それをつい可愛いと思ってしまっ、ジヨンがいた。

ジヨンはベッドの上のルナのそばに腰をおろし、頭らしき凸部に撫でようと手を伸ばすが、少し考えて止めて声をかけた。

「ルナ、どうした？」

「。」「

「言ってくれなきゃ、わからないな。いくら俺でもさ。」

「。」「

「ルナ、？」

「ズルい。」

少し間の後、本当に蚊の鳴き声のように小さな声で、ルナが言った。

「ずるいつて、何でかな？」

とても優しい綺麗な声で、ジョンが聞いた。その声は、少しだけ女性的な包容力が感じられた。

「だって、だって。私は恥ずかしくて、口に出して上手く言えないのに。ジョンは誰にでも簡単に言うじゃん。」

さっきよりも大きくなったけど、拗ねてるのを全く感じさせる声は、とても愛らしかった。

「言う言うって、何を？」

すると、一瞬で空気が変わって、布団で顔が見えないのに、ルナの顔が赤くなったのがわかった。

———
今だ。———

と言わんばかりに、先ほど引つ込めた手を出して、ルナの頭である場所を軽くタッチした。

「あ、愛してる。って、誰にでも言うじゃん。」

拗ねてるルナを可愛いと思っていたのも束の間、その言葉を聞いた途端、素直に動揺した。

「俺、ルナにしか言っていないよ。」

「嘘だ。私、聞いたもん。ゲストルームの前で。」

「やっぱりいたんだ。それは、完全に誤解だよ。」

「う、かい？」

「そ、誤解。ちょっとついてきて。」

いきなり連れ出す形で、布団をはがされたルナは少し戸惑った顔をしていた。(Luna side)

——ちよ、ちよっと。何なのよ！いきなり！！——

と思ったが、声には出せなかった。

ジョンが今までで一番楽しそうな顔で、ルナの手を引っ張って廊下を進んでいくからだった。

とても楽しそうにしているジョンに、ルナは最初は呆れていたが、階段を2階から3階へ上っていくうちに、呆れを通り越して楽しくなってきた。

3階にある、ひとつだけ変わった扉を持つ部屋に入った。
するとジョンは、やはり楽しそうに、

「この部屋は、大昔なら使えた魔法に関する本が置いてあるとこな
んだ。

俺は、小さい頃に暇になる度に、夢のような魔法が載っている本を、
まるで童話を読むかのように読んだんだ。」

「魔法つて、今でも使えるの？」

「ううん。使えない。

ただ、、、。」

とジョンは言葉をためた。それにはルナも気になり、

「ただ　？」

と聞き返す。

「ただ、見つけたんだ。ひとつだけ使える魔法を。」

「ふえ　？」

ルナが思わず、ハとへの間の間のようななんともおかしな声をあげれば、
ジョンがどういうことか説明した。

「いろんな本を読んでるうちに魔法は、太古には空気中に含まれて
いた、神より与えられた力って意味のブッダイシアンって呼ばれ
る物質を、想像とか呪文で動かすことで使えたんだ。」

でも、現在、このブツダイシソアンは存在しない。言ってしまうば、架空の物質になってしまってる。

「けど俺は見つけたんだ。この部屋の本に、少しだけその物質がついてるのを。」

それでも、微量だから、ほとんど魔法は使えない。

「後一回でも、簡単な魔法使っただけで、きっと全部使い切っちゃって、もう使えなくなるね。」

「でもなんで、そんなことわかるの？」

「あれは、偶然だったんだ。」

俺がまだ6歳程だったとき、本を読んで、ふと未来に行ってみた。って考えながら、本に書いてある呪文を詠んだんだ。

そしたら、いつの間にか、電車の中にいて、コケて泣くのを我慢する俺を優しく慰めてくれた女の人がいたんだ。

俺は、その日からその人がずっとずっと好きで、忘れることがなかった。

だから、舞踏会で君に会ったときは、運命を感じたんだ。ねえルナ。汽車で俺を助けたのおぼえてる？」

「う、うん。」

「じゃあ、これから過去に行こう。ゲストルームに客が来てたときの時間に。」

「でも、そしたら、もう魔法使えなくなっちゃうんじゃない？」

とルナが言うと、ジヨンはフワリと笑ってこう言った。

「そんなことどうでもいいよ。俺は、誤解が解けることの方が大事

だからさ。ね？」

ね？と聞かれて、ルナはつい「うん。」と頷いた。

ジョンは本を見ながら、なんだかおかしい呪文を唱え始めた。
するとどうだろう。

不意に体がフツと浮いたような気がした瞬間。目の前が暗くなって、
またすぐに明るくなった時には、もう前の部屋にはいなかった。

ここはどこかというところ、例のゲストルームだった。
コソコソと部屋の外から誰かが近づいてくる音がしてきた。
するとルナはふと疑問。

「私たちって、他の人にも見えるよね？」

ジョンはやや首を傾げてから、

「うん。見えるけど、なんで？」

「これからあなた達と誰かさん（多分、浮気相手でしょうけど？）
が来るのに、ここにいていいの？」

「あー、、、ダメ。」

と言って、ニカツと笑った。何で笑ったのかはわからないけど、。
多分、未だに魔法を使っていることを楽しんでいるのだろう。

「さ、早く隠れなきゃ。」

とジョンがニコニコしながら、ルナの手を引いた。

ゲストルームは、入って右側に壁があつて、左に向かつて部屋が広がっているのだが、2人はその左奥にあるクローゼットルームに身を隠した。

そこは、小規模のゲストルームだったために、客人の服を10人程度余裕を持ってかけられるスペースと、ジョンなど、家の人が服を置いておける、二部屋構造になっていて、ジョンとルナはその後者側のスペースに隠れていた。

すると隠れた途端に、そのゲストルームに2人の男性が入ってきた。相手が男性ということに気がついてルナは「はっ！」と息を呑んだ。ジョンがうんうんと頷いているのを背中から感じた。

因みに、クローゼットルームの中でも、身内用のスペースにいる2人は、その狭さもあつて、軽く密着していた。

ルナの首には吐息がかかり、背中からは心臓の音が伝わってくる。さらに言えば、2人の格好は座つてはいるものの、ジョンの好きな後ろから抱きしめるような格好だった。

ジョンの流れに任せたら、ついそうなつてしまったみたいだ。

2人の男が話し始めると、すぐさま耳栓をされてしまった。

ルナがムスツとすると、ジョンは耳栓を少しずらして微笑みながら言った。

「まだ、世間話だからいいだろう？ 大事なところはちゃんと聞いてもらうから。」

ルナの顔は元には戻らないけど、ジョンは静かに優しい微笑みを見

せた。

ルナが最初見た時にジョンを惚れた要素は、顔立ちも少なからずあったかもしれないが、実際のところはジョンに『異性』と『優しさ』のオーラが出ていたからに違いないだろう。

ジワジワと時間が過ぎ、漸く耳栓がとれた時に聞こえてきた言葉は、

「カルティ、聞いてくれよ。」

昔、お前にだけ未来に行ってみたことがある話したよな？」

「ああ、うん。」

カルティと呼ばれた男が、そんなこともあったな、というような拍子で答えた。

「その時に逢った運命の人覚えてる？」

俺に、泣いてもいいんだって教えてくれたんだ。

そのおかげで、俺は今も思ったままに生きてられるし、心も子供の時のまま豊か、いや子供の時よりも豊かに育った。

全部、本当にあの人のおかげだよ。

その人が、舞踏会に来たんだ。嬉しかった、本当に。泣くかと思っただけ、憧れだと思ってた気持ち、一瞬で好きなんだって気づいたんだ。

思ったよりも気は強かったけどね。」

2人の笑いに、ルナがまたも、ムツとしてジョンを見たら、今度はやや苦笑いで「まあまあ。」と言った。

話は続いてて、

「俺はこんなに人を愛したのは、初めてだよ。」

本気でルナを“愛してるんだ。だから、”毎日いつでもどこでも『愛してる』って、言ってるんだ。」

——ドタドタドタ

と足音が聞こえた気がした。一瞬、扉が閉まった気もする。

「でもジョン。そんなに言ったら、引かれちゃうんじゃないか？」

と言う声はジョンには届かずに、ジョンは慌てて扉に向かっていった。

「おいおい、どうしたんだ？慌てて。」

——今、ルナがいた気がした。——

これが、ジョンの素直な気持ちだろう。

ここで、クローゼットルームにいる二人の視界が暗くなり、すぐに3階の魔法の本の部屋に戻っていた。

「ああ、やっぱり最後まで見れなかったね。」

と言うジョン。きっと、ブッダイシナンチャラが無くなってしまったんだろう。

現在の時間に戻っては来たが、2人の体勢は変わっていなかった。その為、ジョンにもルナにもお互いの顔が見えなかった。

いや、ルナからしたら見られなくて良かった。

嬉しかったのとホッとしたのが重なって、涙と鼻水で凄い泣き顔になっていたから。

それでも、泣いていたのがジョンにはわかったみたいで、

「ね、誤解だったでしょ？」

と優しく言つて、ルナの右肩に顔を乗せて頬ずりをした。

それから、少し時間がたつて、涙も止まり頬ずりも止まった。ついでに鼻水も止まった。

そして聞こえてきたのは、2人の静かな寝息だった。2人とも、嬉しいやら楽しいやらわからないが、優しい顔をして眠っていた。

さらに時間がたつて、その部屋から聞こえてきたのは、

「愛してるよ。」

という、ジョンの一言の寝言だった。

三章

(narrator side)

楽しい時間ほど驚くほど早く、坦々で平々凡々とした時間ほど怖ろしく永く感じるものである。

ジョン王子とルナ姫が出逢ってから、色々なことの連続で、2人にとってこの時間はきつと短かつただろう。

さて、2人の恋はまだまだ始まったばかり。
その2人を待つ試練は、『秘密』。

『秘密』なんて誰にだってある。
隠しているうちは、まだかわいい秘密。でも、それがいつの間にか、嘘という名の檻の中にしまわれてしまった時には、もう重く汚い秘密に変わってしまう。

あなたは、『かわいい秘密』と『重く汚い秘密』、何個持つてる？

2人にある秘密。

今から言うことは嘘なんかじゃない。真実。

ジョン王子。

生まれた瞬間には、皆に祝福された。

しかしながら、赤ん坊を産んですぐに王妃が体調を崩された途端に、王様の周りは慌て出しジョンは祝福されない存在になった。

何故かというと、実は、ジョンが生まれた時の名前はジョナシユワではなくて、ジョセフィーヌだった。

つまり、女の子としてこの世に生を受けたのだ。

しかし、王を継ぐものは男児でなければならない法律のせいで、ジョセフィーヌが後を継げないと、継ぐものがないと察知した途端に、王様の周りからは「何故女の子なんだ。」と罵声に近い声があった。

そこで王様が出した結論は、ここでの一切を他言無用とし、ジョセフィーヌをジョナシユワとして、つまり男の子として育てることに決めたのだった。

ルナ姫。

ルナは元々名前がなかった。つまり捨て子だったんだ。

だけどマイアーズさん夫妻は、神からの贈り物ではないか、と喜び家で育てる事にしたのだ。その時はまだ男の子のルークとして生きていた。

それがルナに変わったのはルークが丁度１８になった時だった。

その頃はルークは毎日、母を死に追いやった病に苦しむ父を見て、嘆き悲しんでいた。

なんとかお金をつくって、治療させてやりたい。と思って、その可愛らしさを持つ容姿をいかして、身売りをしようと考えた時もあった。その時は、父ちゃんにこっぴどく怒られたのをルークは今でも忘れていないだろう。

そして誕生日、と言ってもマイアーズ夫妻に拾われた日だが、その日に街に、王子の誕生日を祝う舞踏会で后をさがすと書かれたビラが貼られているのを見て、ルークは「これだ！」と思い、ルークを捨ててルナになることを決めた。

それで、父ちゃんを救いたい。その一心でルークはみるみる男に見えなくなっていくたのだった。

そう、2人は性別を隠して生きているんだ。

だからこそ、ジョンにもルナにも些細なことや言葉に、他の誰より感動してしまうのだろう。

そして、だからこそ、

2人は本能的に『異性』として惹かれていったのだろう。

2人にその秘密を打ち明けられる勇氣は、まだ無い。

(Jon side)

あれから数週間が経った今日。俺とルナの結婚式が行われようとしていた。

予期せぬ誤解も解け、お互いの気持ちも再確認出来たから、あの事件はあつて良かったのかもしれない。

でも、ルナを好きになればなるほど、自分の中の罪悪感が増すばかりだった。

——ルナが俺が、実は女だったって知ったらどんな顔をするだろう。どんな風に感じ、どんな風に思うだろう。——

結婚式の当日になっても、俺の頭はそればかり考えていた。

式が始まり、ウェディングドレスを纏ったルナを見て、素直に可愛

と思った。

それと同時に、俺も来てみたかったな、という感情も湧き出し素直に笑えない。

こんな薄い笑顔じゃ、ルナは変だと気付くだろう。

—— いずれ言わなきゃいけない

でも、そのいずれがいつなのか、俺には全くわからなかった。

色々考えすぎて、司祭が言っている言葉もよく聞こえない。

「汝は—— 誓いますか？」

「ジョン？」

「は はい、誓います。」

「—— 誓いますか？」

「はい、誓います。」

「—— 誓いのキスを。」

どこかで聞いたことがある。愛している人のキスが呪いを解く、一番の魔法だって。

女なのに、男として生きていく運命を背負わされたのって、呪いのうちに入るだろうか？

でも確かに愛してるけど、これは女同士だよね？
それでも呪いは解けるの？？

そして、2人は唇をかわす。

俺は右に首を傾けて、ルナは俺から見て左に。

誓いのキス。

これが俺の初めてのキスだった。

だって、女の人とキスなんて考えられなかったから。

でも、このキスは柔らかい。柔らかくて甘い。

味ではなくて、心も体も脳みそも溶けてしまうような、そんな甘さが唇から流れ込む。

同性だったはず、なのにとっても甘い。

まるで、異性にするそれと同じようだ。

——長い——

周りは皆が思い始める。

俺も長い気はしたけど、この甘さに歯止めがきかない。それはルナの方も同じみたいで、唇を離そうとしない。

舌をいれたディープなキスじゃない。でも、離したくない甘さが確かにある。

甘くチョコレートのように。でも、チョコみたいに飽きることはない感覚。

呼吸をお互いの口の中でし、強欲なまでに愛を感じる。

『愛』という名の熱が口から顔へ、顔から脳みそ、体へと伝わっていく。

どちらの口からともわからぬ息が、口の端からフツと漏れれば、誓いのキスはようやく終わりを迎えた。

(Luna side)

結婚式で愛を確かめるような、それでいて激しくはない、溺れるようなキスの後。
私はふと思ってしまった。

——あれ？違和感が、ない。——

喧嘩をした日について拒絶してしまったのも、実を言えば相手が男だったから。
結婚式でキスをしないわけにはいかないから、心では仕方なく思っていた。

一瞬で終わるだろうと踏んでいたそれは、はたから見れば気の遠くなるような時間、しかし自分達には数秒にしか感じない。それ程の長いキスだった。
それなのに、違和感がない。寧ろ、足りないと思ってしまったのを押し殺したくらいだ。

ルナの中で、久しぶりに『俺』が出てきたのもその所為だろう。

——あれ？俺、もしかして、そっち系？ いやいやいや

でも、事実は心が示していて、いくら頭が拒否しても変えられないものだった。

それ程までに、ジョンのことを好きで、愛してしまったのだろう。

それから、皆が帰った後で頭ではなく、心が感じたことが口を伝って、ジョンへと向かった。

「嘘ついてるよね。」

ジョンと声が重なる。向こうも同じことを考えていたようだ。それは、女のいや男の勘だった。あるいは人の誰しもが持つ勘なのかもしれない。

「え？」

また、重なる。

「やっぱり。」

声が重なったのはここまでだった。

そして次に、2人の声ではなく、唇が自然と重なった。

まるで、以心伝心するかのように、お互いの疑問を確かめるように。

はたから見たら、何が起きているかわからないだろう。
でも、2人にはわかる。

さっきの重なった言葉の意味も、お互いの答えも。

その嘘がお互いに大切だったことも、これからは『重く汚い秘密』
ではなく『軽い可愛い秘密』になることも。

そして、触れる口から、舌から、手や足から感じる『異性』。

2人には秘密がいらないとわかったことで、全身を縛り付けていた
鎖のような拘束具がはずれたような気がした。

手枷、足枷、首枷、そして何重にも巻かれた鍵付きの鎖。それらが
はずれて、2人の体はもう軽かった。

今まで以上に、求めた。お互いがお互いを。

ただ、ひとつ。どうしてもはずれない糸。

赤い、赤い、赤い糸。

2人の小指にがっちりとはまって、いくら誰が取ろうとしても取れ
ない。

その糸だけは、はずれず、互いを離れられないものにした。

この糸は、世間ではきつとこう言うだろう。

『運命』

と。

終章

(one side)

2人の嘘は、お互いの守りたい人、物を守るために、2人だけの秘密になった。

そう永遠に。

王様などで、その秘密に気付いたものも少なからずいた。

なにせ、王様が会うことがないと思っていた、孫が生まれたのだ。もちろん、産んだのは、、。

世間的にはルナが産んだことになってはいるが、この家族で、想像すらしなかっただろう楽しみに満ちた生活を送っていた。

それはそれは、仲むつまじく、楽しく、。

大きな城の前には大きな庭園が広がっていた。

王の住むその城の庭園には、そこらとは格の違う噴水が設備されていた。

その噴水から朝と夜の7時になると、高さを上げて水が噴き出す。

芸術ともいうべき水のカーテンが、庭園の真ん中で何かを囲うように広がっている。

今は、朝の7時。

5分が過ぎ、その水のカーテンも威力を弱め始め、段々にその隠されたものが露わになる。

そこには銅像があつた。

王子と姫。

2人が寄り添う銅像。

威力がなくなるにつれて見えてくる題名。

『 True Love 』

あれからいく年かが過ぎ、トリネゴア王国に真実の愛と永遠の愛を誓うモニュメントが1つ造られた。

いったい誰が造ったのか、はたまた何のために？

それは作者の私だけが知る所。

しかし、ジョン、ルナが亡き後もこうして語り継がれる『愛』。

あなたにとって、「真実の愛」とはなんですか？

信じること？ 守ること？

それとも、ただ愛すること？

あなたは見つけただろうか？

私にはまだわからない『本当の愛〜True Love〜』を。

.

終章（後書き）

この作品を読んでくださった方、本当にありがとうございます。

まず、お礼が言いたかったです。

僕はモバゲー（エブリスタ）で小説を書いてますが、前に書いた恋愛ものは全くもって面白くなかったと思います。

自分でも何を書いているのか、書きたかったのかがわからなくなっていました。

それでも「書きたい、自分の言葉で恋愛のはなしを。」と思い、こうして書きました。

今回、書いていったのは『恋愛もの』の中でも『純愛』でした。

そして小説の題名は、

【 True Love（真実の愛） 】

そうですね、自分でもネーミングセンスのなさに呆れます。だから、仮だと思って貰って結構です。

名前通りの話になるかどうか、最初の段階では分からないで書いていったのですが、皆さんに読んでいただけるような小説にしたいと

思って書きました。

いつも短編を書いていたのですが、今回は長編で書いていきました。

結局、何が言いたかったのか、。

書きたかったのは主に中盤から終盤の、男だって女だって良いじゃないか、だって好きなんだから。的なところだったんですけど、

途中、作者の向上心や虚無心とかで、脚色がついて、自分でも読み返してみると、何だったんだと吃驚します。

汽車の中で、ジョンに言ったルナの言葉が、一応自分の中で一番好きな言葉です。

意味的には、
男だって女だって、身分だってなんだって、全部関係なく感情はあるんだ。

ってことで、
のちのち付け足したいとすれば、
『恋だって、お金も性別も関係ない!!』
ってことなんです。

作者自身、意外と早く終章にきたことに驚きました。
でも、今まで書いてきたもの。書こうとしてたもののなかで、一番1ページの内容がギュッと詰まってる気がします。

それも友人Aがふともらした言葉のおかげ。
『中身詰まってた方がおもしろいよね。』

小説の話をしてて、自分に言われてるわけでもないのに、グサツときました。

物語は、ページ数が多い方が良い。と思って書いてきた今までの小説は、1ページがとても短かったです。

でも、1ページが長くて、ページ数でみると全然進まないTrue Loveのがすごくやりがい感じました(＾o＾)

あとがき、長くなってすみません(┐┌)m

長い恋愛小説書くの初めてで、メツチャ緊張しましたが、またさらに面白い物語書けたらイイナって思ってます。

これからも宜しくお願いします(・・)ゞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8917q/>

TrueLove

2011年2月19日14時10分発行